

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 31 日現在

機関番号：11501

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010 ～ 2012

課題番号：22500691

研究課題名（和文） 通所介護施設における認知症高齢者困難ケース介護とスタッフ職場研修に関する研究

研究課題名（英文） The Study on care-providing difficulties perceived by staff caregivers in daycare facilities for demented elderlies and staff training on the job

研究代表者

細谷 たき子（HOSOYA TAKIKO）

山形大学・医学部・看護学科

研究者番号：80313740

研究成果の概要（和文）：

認証対応型通所介護施設において、スタッフに入浴・排泄ケア等の介護困難をもたらす状況と介護方法を具体化するプロセスを明らかにし、職場研修における教育プログラムの検討を目的とした。スタッフおよび研修企画担当管理者・スタッフリーダーにグループインタビューを実施した結果、介護プロセスは、①困難状況、②ケア提供者の判断、③認知症高齢者（利用者）への対応、④認知症高齢者（利用者）の反応、の順を追っての振り返りが理解しやすいことが明らかになった。また、職場研修では 30 分未満の介護困難状況のロールプレイ、その記録を介護プロセスに整理し日々の情報交換時に活用すること等が現場状況に即していることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：

We aimed to investigate the process that the caregivers in daycare facilities provide problem solving care for the demented elderly in confusion or refusing them so that education programs for on the job training should be developed.

Qualitative analysis of group interviews of daycare staff and staff leaders resulted that the care process may effectively be reflected in the order of ; 1) difficulty perceived situations for the staff, 2) their assessment of the situation, 3) how they provided care to the demented elderly, and what they did for them, 4) how the elderly people responded to them. The group interview of staff training managers indicated that the roll playing by the staff on the current events and the problem solving discussion within 30 minutes followed by documentation should be recommended for their education program.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2012 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：生活科学・生活科学一般

キーワード：認知症高齢者 通所介護 スタッフ 介護困難感 職場研修

1. 研究開始当初の背景

厚労省の推計では 2015 には認知症高齢者は 250 万人に増加し、その 48%は居宅生活であると予測されている。居宅生活を継続するために利用する認証対応型通所介護施設（認知症通所施設）では、①自宅往復での生活による環境変化がある、②利用者の認知症症状には軽度から重度までの幅がある、③認知症通所施設では看護師の雇用が任意であり、非雇用の場合は医療的アセスメント・ケアが行き届かないリスクが高いなどの特性にみあった介護が求められる。しかし、通所・入浴拒否や排泄ケアの問題など介護困難感を感じるスタッフは少なくない。通所施設の特性を考慮した認知症高齢者への介護困難に対応するための具体的介護をスタッフが習得するプロセスの研究は少ない。また職場における効果的な教育プログラムも開発されていない。

2. 研究の目的

認知症通所施設において、スタッフに入浴・排泄ケア等の介護困難をもたらす状況と介護方法を具体化するプロセスを明らかにし、介護問題を解決する職場研修の教育プログラムを検討する。

3. 研究の方法

1) A 県内の 3 認知症通所施設に勤務する介護スタッフ（スタッフ）に約 90 分間のグループインタビュー（G I）を実施した。参加者は各施設 4~6 名、G I の内容は、通所拒否、入浴拒否、排泄ケア等の困難が軽減した経験、大切なこと、心がけていることについてであった。

2) 逐語録を事例毎に文脈に沿ってプロセスを追って分析した。

3) 分析した内容について、各施設スタッフに送付し、妥当性を 4 段階で尋ねた。

4) プロセス分析の結果をまとめ、A 県内の 4 認知症通所施設の職場研修企画にかかわる管理者 4 名、およびスタッフのリーダー 4 名を対象に職場研修の方法につちえ G I を実施した。

4. 研究成果

1) 介護困難状況が軽減された介護プロセスは、①困難状況、②ケア提供者の判断、③認知症高齢者（利用者）への対応、④認知症高齢者（利用者）の反応、の順に分析された。例えば、以下のようであった。

事例 1 入浴介助困難、排泄介助困難、コミュニケーション困難。87 歳、男性、認知症日常生活自立度Ⅲb、アルツハイマー型認知症、熱傷治癒後、前立腺肥大、向精神役服薬中、難聴、元警察官、妻と二人暮らし。

入浴介助が困難な状況

・「皮膚がぴりぴりするから入りたくない」「今日は入らなくていい」
・レク活動をしているときに入浴誘導すると強く拒否。

ケア提供者の判断

・その日の精神状態によって違う。
・信頼関係ができていない職員とはスムーズである。
・元警察官で、規律正しい生活を送ってきた利用者。レク活動中に和を乱すような方を、強い口調で戒めることがある。今はこれをする時間だと本人が認識している以外のこと、つまり、レク活動中に入浴を勧めることで、混乱するのかもしれない。
・浴室に行くと、入浴することを認識でき覚悟ができるのではないか。浴室ではない所で「お風呂に行きましょう」と言うとうまくいかないと思うのかもしれない。

利用者への対応 → 利用者の反応

・時間を変えて → 入る時もあれば誘導してみる。 入らない時もあった。
・誘導する職員を変えてみる。
・来所しバイタル測定 → 入浴拒否は減少終了後（レク活動に入る → し穏やかに入浴前）、男性利用者の中で最初に入浴を勧めた。
・最初は「ちょっとこちらに来て下さい」「あちらの部屋に一緒に行きましょう」「お話ししましょう」と、入浴に誘うような声掛けをせずに浴室に誘導。
・集団の部屋を離れて 1 対 1 で話しをし、そのまま浴室で「お風呂に入りましょう」と促す。

排泄介助が困難な状況

・便器の蓋を上げるのを忘れて、尿を床にこぼしてしまう
・夜間は一人でトイレに行けないので朝汚してしまう
・布パンツなので尿もれで尿臭がきつい時がある

ケア提供者の判断

・職員が声掛けをすることで、尿もれは、防げる。
・家族はリハビリパンツを穿くと、尿もれが分からなくなり、リハビリパンツに頼ってしまうのではないかと心配。
・自宅ではそわそわする様子が見られるとすぐにトイレへつれていくのでめったに汚れない。

利用者への対応 → 利用者の反応

・落ち着かない状況時 → 失敗の頻度減少

にすぐ排泄誘導する。

コミュニケーション困難の状況

- ・難聴で聞き取りが困難である。
- ・目を見て話すと通じるときもあるが、通じないときもある
- ・伝えたいことを間違って解釈している場合、職員が再度伝えると精神の不安定を招くことがある。

ケア提供者の判断

- ・話す人の口を見て確認していると思う。
- ・不安定になるのは自分の中で整理がつかなくなり混乱してしまうのだと思う。
- ・職員の声掛けにより精神面の不安定を避けられることもある。
- ・読んで理解できる能力は持っている。

利用者への対応 → 利用者の反応

- ・大きい声でゆっくり → 通じるときもあれば目を見て話す。通じない時もある。
- ・筆談
- ・重要なキーとなる単語を → 理解できた書いて見せた。

事例2 通所拒否、73歳、男性、前立腺癌の抗がん剤を外来治療で継続中。食事・移動自立、排泄見守り解除、入浴声掛け介助、衣服着脱声掛け介助、独居。長男夫婦が隣接して居住。几帳面。盆栽が趣味。

通所拒否の状況

- ・迎え時「庭の手入れをしなければならない」「雪を片づけなければならない」「家で仕事をしなければならない」と通所拒否。
- ・信頼関係ができた職員を固定し迎えに行ったがその人も受け付けなくなった。
- ・来所できた日は、引き続きナイトケアであり、ナイトケア時、帰宅要求が強くなり、「帰る、帰る」と外に飛び出しそうな勢い。

ケア提供者の判断

- ・家の鍵をかけることを心配していた。
- ・道路を全部雪かきした。外での作業が好きなようで、雪を見てしまうと「片づけなければいけない」と思うのだろう。
- ・言葉が通じなく、医療者とコミュニケーションがうまくいかなかった状況があった。
- ・本人が間違っただけをしていると、周囲の人から指摘を受けて、嫌な気分を味わったことがあった。
- ・麻雀が好きだという情報があり、麻雀を試してみようかと思いついた。

利用者への対応 → 利用者の反応

- ・送り出しのヘルパー → 数回は乗車。利用を勧め実施。拒否が再開。
- ・麻雀パイがあるので、 → 初めは「いや」見てみないかと声掛け。麻雀パイを見た時表情が穏やかになった。
- ・急いで麻雀をする準備 → 自然に麻雀をするように

手を動かし

た。
→その後継続
通所できた。
→本人から最
近「楽しい」
との言葉を
聞くと家族
の情報あり。

- 2) スタッフが心がけていることは：
- ①介護情報を共有し、チームワークで対応、
 - ②介護困難の原因を考えて対応
 - ③根気強くかかわる
 - ④利用者との信頼関係づくり
 - ⑤利用者同士の交流をとりいれ、精神安定を図る
 - ⑥声掛けのタイミングを調整する等であった。

3) スタッフに分析結果をフィードバックした結果、とてもそう思う 85%、そう思う 15%の同意を得た。

- 4) スタッフの介護研修のニーズとしては：
- ①認知症高齢者がスタッフによる介護を受け入れる場合と拒否する場合を振り返り、その理由を振り返る機会がない。
 - ②スタッフは認知症高齢者へのケアを経験的に感覚でわかっているが、言語で表現することが苦手である。
 - ③スタッフ間で情報を共有し、対象の理解を深め、ケアについて共通理解する必要があるが、言語表現の不足から共通理解が深まらないリスクがある。
 - ④若いスタッフは認知症者への介護の基本を学んでいるが、実践面でコミュニケーションがうまく取れない場合が多い。
 - ⑤中堅層のスタッフは認知症者とのコミュニケーションは熟練度が高いが、疾患への知識等基本的な理解が不足がちである。
 - ⑥スタッフは認知症の医療的知識とコミュニケーション技術との両方を学ぶ必要がある。

- 5) 職場研修の方法としては：
- ①月に1度の全スタッフ間での情報交換時を利用し、30分未満の研修時間を確保する。
 - ②職員同士がスタッフと認知症高齢者に役割分担してロールプレイし、送迎時の言葉がけ、質問されて困った状況などを再現し、スタッフ同士が意見交換する。
 - ③ロールプレイで再現されたケアプロセスを①困難状況、②ケア提供者の判断、③認知症高齢者への対応、④認知症高齢者の反応の順に分析し、記録する。
 - ④記録は語られた言葉の方言、敬語などをそのまま記録し、日々の情報交換時に再度検討する。
 - ⑤ケア提供時の言葉がけや排泄誘導につい

て繰り返し実施される場合は、その時間、頻度も記録する。

⑥認知症高齢者の属性、生活歴、在宅介護のキーパーソン、認知症発症の時期、家族の介護歴、医療機関の受診状況、利用者の気質や性格などを、わかる範囲で記録する。

⑦同一の利用者を時間を追って分析し、認知症の進行状況を合わせて検討する。

⑧認知症高齢者の服薬支援の家族の意向の情報を記録する。

これらの事例検討の記録は、スタッフ間の情報交換時に利用することができる。職場研修のプログラムはこれらの要素を含むことが望まれる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計 1 件)

細谷たき子、鈴木育子、小林淳子、叶谷由佳、森鍵裕子、大竹まり子、浅川典子：認知症対応型通所介護施設利用者の帰宅願望・通所拒否時のスタッフの判断と対応、第 16 回日本在宅ケア学会学術集会、東京、2012 年 3 月。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

細谷 たき子 (HOSOYA TAKIKO)

山形大学・医学部・教授

研究者番号：80313740

(2) 研究分担者

鈴木 育子 (SUZUKI IKUKO)

山形大学・医学部・准教授

研究者番号：20261703

小林淳子 (KOBAYASHI ATSUKO)

山形大学・医学部・教授

研究者番号：30250806

森鍵 祐子 (KOBAYASHI ATSUKO)

山形大学・医学部・助教

研究者番号：20431596

大竹 まり子 (OTAKE MARIKO)

山形大学・医学部・助教

研究者番号：40333984

佐藤 和佳子 (SATO WAKAKO)

山形大学・医学部・教授

研究者番号：30272074

叶谷 由佳 (KANOYA YUKA)

横浜市立大学・医学部・教授

研究者番号：80313253

浅川 典子 (ASAKAWA NORIKO)

埼玉医科大学・医学部・准教授

研究者番号：00310251